

## 四月―子どもの視点に 立ち返るとき

津守 真

先日、二歳半になる私の娘の子どもを私の学校につれていった。はじめ私は二人でゆっくり遊べる静かな空間がいいだろうと思い、公園に出かけてでもない小学部の部屋につれていった。ところがその子はそこでは何か落ち着かず、私と手をつないで歩き回るうちに幼稚部の部屋に入った。その子はすぐに玩具棚にゆき、籠をひっくり返し、気に入った物を取り出して遊びはじめた。いつも幼稚部の子どもがしている通りのことである。

幼稚部の部屋には子どもの目の高さにくくも仕切られた棚があって、幼児の好むがらくた道具があ

る。幼児がいつも遊んでいる場所には幼児の視点で物が並んでいることに、私は改めて気付かされた。

いつも私が保育をしている部屋なのに、この日、私の目には違う部屋かのように新鮮に映った。孫を連れてきた私は、学校側の人間ではなく、子どもを学校につれてくる親の立場、つまり、子どもの視点に共感する親の目であたりを見た。

この日の私は、久しぶりに親の立場になることによつて子どもの視点を取りもどしたのだが、逆の場合もあるだろう。保育の専門職員の立場になることによつて、功利的雑念から解放されて子どもと純粹につき合うことができる場合もある。職員が自分の幼い子どもを学校につれてくることを私は嬉しく思っているが、そのとき、いつもと違う動き方をしているのに気付くことがある。職員としては子どもの視点をよく見ているのに、わが子となるとそれを見られなくなる場合もあるし、逆に、自分の子ども

はよく見ているのに、職員となると社会の枠にしばられてしまう場合もある。しかし、保育や教育においては、親としての立場と職業人としての立場とはそんなに明瞭に区別できないのではなからうか。

\*

しばらくして、その子は、玩具籠をひっくり返して遊ぶうちに、たまたまその日にはじめて来た若い実習生の手をひいて絵本棚にいった。さつき幼稚部の部屋に入ってきたときに、横目で絵本のありかを見ていたのである。それまでうろろろしていた実習のお姉さんも、その子に選ばれてつき合ううちに嬉しくなり、その子の視点で見えるようになってきた。

二歳の子どもが遊び相手として選んだのは、職員ではない実習のお姉さんだった。子どもが自分の目で選ぶものは、場所についても人についても確かである。

ずっと経って庭に出たとき、その子の母親が来

た。母親をみるとその子は泥を拾っては水たまりに投げ、一回ごとに歓声をあげた。泥を投げる一回の行為に全身の喜びがこめられていた。泥水のしぶきがかかっても、母親は泰然としてそれを受けていた。二十数年前には飛行機の音も恐くて私にとびついてきた、また、泥にさわれなくて指先でそっとふれていた子どもである。あのときの混乱を保育者に受けとめてもらって、いま自分が母親になり、二番目の子の出産に伴うさまざまなことにも混乱することなく動じない。子どもの視点で見える者になっっている。私は、私の学校の母親たちや職員たちを重ね合わせて考えた。

四月は、親がわが子をはじめて園に連れてくる時である。園や学校の職員は、子どもに共感する親の視点に出会い、親は職員に出会うことによって子どもの視点を新たに発見する。両者ともに保育の原点に立ち返らされる好機である。(愛育養護学校)